
高町亜美の物語

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高町亜美の物語

【Zコード】

Z7765Y

【作者名】

学校嫌い

【あらすじ】

黒い穴に吸い込まれ、空に放り出された高町亜美は、落下中にド
ラゴンと遭遇するが意識を失ってしまう。次に目を開けた時、高町
亜美の目の前にはいたのは。高町亜美。彼女は異世界で
何を成すのか。

初恋

「ひやあああああああ！」

自由落下を始めて五分程経過しているけど、紐なしバンジーみたいで楽しい。バンジージャンプをしたことがないからいまいち感覚は分からぬけど、戻つたらやってみようかな？あとスカイダイビング・・・は今してるからいいや。

バサ！

突然聞こえた、何か羽ばたく様な音のした方を見ると、そこには白くて巨大なドラゴンがいた。正確にはどうか分からぬけど、まあ形状からして間違いないと思う。なんでドラゴンがいるのか、とか思いはしたけど、多分ここって日本じゃないから、いても可笑しくはないかな、とも思う。

はあ・・・やつぱり日本じゃないのか・・・。

それを何となくでも理解すると一気にテンションが下がった。さつきまでの楽しい気分が嘘みたいだ。少しは希望があつたんだけどなあ・・・せめて地上が見えてくるまでは、日本だつて思つていたかつた。街なんかを見れば、どこだか大体の見当は付くと思つたけど、ドラゴンなんて、日本どころか世界のどこにも存在する訳がない。

バサ、とまた羽ばたく音が聞こえて、見ると落下しているあたしを、

わらわのデータバンクが追いかけてきていた。

「……で死ぬのかな？」

そう思つた途端、一気に恐怖が込みあがつてきた。

やだ……こんな訳の分からぬ所で死にたくない……。

「たすけて……旭……」

何の力も持つていないあたしに何ができる訳もなく、唯それを願うことしかできず。

目尻に浮かんだ涙をびりびりひともどき。じ。

あたしは意識を失つた。

何かがあたしを受け止めるのを感じながら

旭と零の二人とは、転校した小学校で会つた。初日にはみんなに見ら

れていのを少し恥ずかしく思いながら、血圧紹介をして、席に向かつと、後ろには無表情の男の子がいた。

その男の子が旭だった。

話しかけても無視されて、人付き合いが苦手なのかな?と思いながら席に着くと、前に座っていた女の子が小声で、何言つても無視されるから放つておきなよ、と言つたけどあたしはそんなことどうでも良かつた。

折角席が近くなったんだから、お喋りしたい。

その日からあたしは、ずっと旭に話しかけていた。一週間経つても二週間経つても旭は一度も返事をくれたり、表情を変えてくれたりしなかつたけど、一ヶ月位が経つた時に、旭の顔を暫くじーっと見つめていて、笑つたらどんな顔するのかな?と思つて、

『ねえ・・・少しほは笑おつよ?』

と言つと、旭はまづして、と聞き返してきた。

質問された、といつことよりもやつと返事をしてくれたことの方が嬉しい、あたしははしゃいでいた。そんなあたしを見て、今度は旭から問い合わせてきた。

『何がそんなに嬉しいの?』

と。

あたしはその問い合わせに無視されると辛いから、みたいなことを言つたと思つ。

そして、また旭は質問に答えてくれてないと言つて、あたしは笑つた顔が見たいだけ、と答えた。

『・・・・・はは』

その時、旭は初めて笑つた。

何かおかしな所があつたのか、それ以外に何かあつたのかは分からぬけど、とにかく旭は笑つた。

それからは旭が笑うことにはほつひとつとんど無かつたけど、それで色々話してくれるようになつた。

二年生になつて、いつだつたかは忘れたけど、一人で体育の後片付けをしている零を見つけて、あたしと旭で手伝つて、その時は、まあ関わることは無いだろうな・・・って思つたけど、次の日に零の方から来てくれた。

用件は昨日のお礼だつたみたいだけど、一度言つてくれたんだからそれで十分だつたんだけど・・・とは思つたけど、多分本人もそれ

が目的だつたんぢゃないと思つ。

それからは雫も加わつて、三人でいることが多くなつた。流石に修学旅行の時とかは無理だつたけど、そういうこと以外では、ほぼ毎日。その過程で、あたしは段々雫に対して抱いている好意が友達に対するそれとは、どこか違うな、と思つようになつた。

それが何なのか理解したのは、雫が小学校を卒業した時だつた。

明日から雫はこの学校にいなんだつて思つと、急に胸が締め付けられた気がして・・・。

これが好きつて感情なんだつて、子どもながらも理解できた。

旭は気付いていたみたいだけど、何故か教えてくれなかつたんだよね・・・。それで良かつたつて思つてるけど。

雫も気が付いていたことにはびっくりしたけど。

ま、その恋が実ることは無かつたけど、変わらず一緒にいてくれたから嬉しかつた。

その内、誰か別の人を好きになるだらうなあ・・・とは思つていたけど、結局今日まで、他の女の子に恋をしたことはなかつたな・・・。

『貴女の初恋が私だつていうことは、私にとっては光榮よ?』

そう言つてくれただけでも嬉しかつたから、良かつたかな?

そんな零の初恋は旭だつたんだよね・・・。でもあたしは恋愛沙汰に疎い様で、零が旭対して抱いていた好意が恋愛感情だとは気付かなかつた。

今では、二人ともめでたくカップルになつてゐるけど・・・。一人とも同じ場所に飛ばされかな？

あの二人にはずっと一緒にいてもらいたい。

旭なら零を何があつても守つてくれるだらうかい。

でも、もし別々の場所に飛ばされていたら、誰が零を守つてくれるんだろう？

誰が零の隣に立つんだろう？

シンシン・・・と何か、先の尖つた様な物につつかれているのを感じて、あたしは落下中に意識を失つたことを思い出して、目を開いた。

「グオオ～」

目の前には、さつきの白いドラゴンがいて、その蒼い瞳に心配そうな色を浮かべてあたしを見ていた。

契約

『やつと皿を覚ましてくれたー!』

「え?」

目の前にいた、心配の色を浮かべてあたしを見ていた白いドラゴンに驚く前に、何か声が聞こえてどこから聞こえたのか辺りを見回してみた。

どうやら此處洞窟のみみたい。壁には松明や照明と言った光源が無いのに、何故か遠くまで見えるほど明るい。大きさから考へると、ドラゴンの巣か何かかも知れない。

適当に見回して、もう一度ドラゴンに視線を戻そとしたら、

『どうかした?』

とまた声が聞こえた。

頭の中に・・・直接?

そんな感じだった。

こんな経験はしたこと無いし、するなんて思つてなかつたから、分からぬけど、所謂テレパシーといつやつかもしれない。それなら、あたしに話しかけてるのは、田の前のドリゴンつてことになるのかも知れないけど……どうなんだろ？

「今、あたしに話しかけているのはあなたなの？」

自分で言つのも何だと、いつになくあたしは真剣になつて聞いた。

旭と零が見たら、多分驚くかも……。

『うん。 もう大丈夫？』

声が聞こえて、明らかにあたしの質問に答えてはいる回答言葉だったから、声の主はこのドリゴンだと確信できた。

どこのか幼さを残すような声をしていて、でも通る声。

外見も手伝つてか、余計に綺麗に見えた。

と、今はそんなこと考へてる場合ぢゃないか……。

「いきなり変なこと聞いてごめん。助けてくれてありがと！」

『うん。 ボクがそうしたいからしただけ』

「それでも、助けられたことは変わらないから・・・。それで、どうして、あたしを？」

『ドラゴンがどんな生命体なのか、なんてことは分からぬけど、漫
画なんかでは大抵が強敵として描かれたりしている。

そんなドラゴンがどうして、人間を助けたんだろう？

考えたけど、返ってきたのは

『助けたいと思つたから』

と言ひ、なんとも表現しがたい言葉だった。

回答として少しずれている気がしたけど、本人がそう思つて行動し
たなら、あたしにとやかく言う筋合はない・・・。

「そつか」

『ねえ、貴女の名前は？』

「え？あ、そつか・・・名乗つてなかつたね。あたしは高町亜美

『アミ・・・いい名前』

「ありがと。あなた？」

そう聞くと、ドラゴンは少しの間黙つた。

『……わたしに名前はないの』

「…………」

それを聞いても、あたしは不思議と取り乱さなかつた。

「血はげ」

『え？』

「え？ あ……何だらう？ あなたを見てたら、急に浮かんできたん
だけど……」「めんね？ なんでもないから気にしないで」

本当に急に、浮かんできて、自分で戸惑つていた。

『ハクア……』

ドラゴンはその単語を噛みしめるよつて、呴いて、その後も何度も繰り返した。

『わたしと契約して？』

「え？」

多分十回くらい、ハクア、呴いた後、ドラゴンは唐突にそう言

つた。契約つて書つのがなんなのか、そんなことは分からない。

分からない筈なのに、分かつた。

だから

「うん」

あたしは頷いた。

立ち上がり、ドアリームに向かい合ひ。

目を閉じて、意識をドアリームにだけ集中すると、唯でさえ静かだったこの洞窟が余計に静かになつたような気がした。感覚が鋭くなっているのか、周りに存在する小さな存在。それがなんなか分からぬけれど、それも感じ取ることができる。

『我の御魂は汝と共に』

汝の御魂は我と共に』

『汝の御魂は我と共に』

我の御魂は汝と共に』

キン、と甲高い音が聞こえた。

『汝我に名を『えたまえ』

「汝の名はハクア」

『我の名はハクア』

「『我の御魂は汝と共に

汝の御魂は我と共に』」

ゆづくつと田を開きながら、最後の言葉を紡ぐ。

あたしとハクアの立っている場所に何か、複雑な紋様が浮かんだ、円が浮かんでいた。

例えが、魔法陣くらいしか思い浮かばないけど、多分それに近いもの。

『後はお互いの血を一滴飲めば、儀式は終わり

人差し指をハクアの前に出して、鉤爪で指先をちょっと突いてもらいうとそこから血が、少し膨らむように出てきた。顔を降ろしてきて、ハクアは指先を舐めて、こくん、とその大きな喉を鳴らした。

すると、ハクアの体が柔らかい光に包まれて、姿が段々変わつていった。

小さくなつていき、その姿は少しづつ人間に近づいていった。

光が収まつた時、そこには小さな女の子が立つていた。

髪はあたしと同じくらい白くて、身長はあたしより少し高い位。服装は白いワンピースだけ。

肌は白いけど、不健康な印象は全くない。

少女の姿になつたハクアは自分の指先を噛み、あたしの方に突きだしてきた。

その指先を口に銜えてその血を舐め取り、飲み込む。

ドクン、と心臓が鳴り、体の中が熱くなつた。

この後すぐにはあたしは意識を失うことを、どうしてか分からなければ、分かつていた。

この先、あたしはこの何も分からぬ土地で生きていく。

多分・・・いや、きっと元の世界には還れない。

一人にも、もう会えない。

「泣かないで？」

その言葉を最後に、あたしは意識を失つた。

旭。

雪。

れぬうな

開始

「ん・・・？あ、そつか・・・」

あたしハクアの血を飲んだ後、氣を失つたんだつけ？・どれくらい寝てたのか、分からぬけど・・・ハクアはどうだらう？

洞窟の見える範囲にはいなー。

ご飯でも探しに行つてるのかな？そういうえば、まだ何も食べてないんだよね・・・帰る途中で吸い込まれたから、お腹も結構空いてたんだけど、こっちに来てからほんとそんなこと気にする余裕が無かつたし。とりあえず・・・待つておこう。

感覚的に三十分位経つた頃、小さな羽ばたき音が聞こえて、見てみるとハクアが姿は少女のままで背中の翼を広げて飛んできていた。その手には何か鹿の様な生き物を抱えている。

まあ、それは良いけど、大きさがね・・・ハクアの倍はある訳で・・・。

細かいことはいいか。

「あーーマ//ーーやつと起きたー。」

あたしの姿を確認したハクアが、嬉しそうにそう言いながら、隣に降り立つた。持っていた鹿の様な生物をハクアが降ろすと、ズシンといかにも重そうな音がした。

「やつとつて・・・？あたしどれ位寝てたの？」

寝ている間の記憶が無いのは多分当たり前だけじ・・・ハクアの言一樣からして、一日一田つて感じやない気がした。

「百年」

「は？」

思わず頗狂な声を出してしまった。

百年？

100年？

ひゃくねん？

ヒヤクネン？

なんか最後の名前みたい。

「いやいや、そりゃなくて…百年…嘘でしょ。」

まず前提があり得ない。人間仮に百年寝て過ごしたとしても、その間体は成長するんだから少しさ背丈が変わっていても可笑しくない。それなのに、あたしの体は悲しい位氣を失う前と同じ。何より、百年も寝ていたなら、その間の栄養はどうから摂取してたんだろう？

「ううん、ホント。でも、わっかはやつとつて言つたけど、これは凄いことだよ？」

凄い？

「何が？」

百年寝ていたことが？

うん、まあ、百年寝ていたことはもう認める。

「わたし達ドラゴンの血が人間の体に馴染むには最低でも五百年、長かつたらそれこそ何千何万という年月が必要になるのに、たったの百年で馴染んだんだから」

どうこうとか聞くと、本来ドラゴンと契約することは相当の鍛錬を積み、肉体的にも精神的にも極限まで鍛えられた者でないとまずできないらしい。これはドラゴンの血に耐える為で、それを疎かした場合、口に含んだ瞬間に強烈な拒絶反応が出て、飲み込むことすらできないとか……。

そして、歴史を辿つてもドラゴンと契約した者はたつたの三人で、その三人ですら、馴染むのに千年近く掛かつたとか・・・。

それなら、どうしてそんな鍛錬なんかとは無縁だったあたしが耐えられたのか？

その上で、たった百年で血が体に馴染んだのか？

それについてはハクアも分からぬいらしい。

「何かあるのかも知れないけど、とにかく良かつた！」

まあ、いいかな？

そこでわたしのお腹が鳴り、空腹を訴えた。

そして、ハクアが持ってきた鹿の様な生物を見ると、何故か食欲が沸いてきた。

「あ、お腹減つた？今から焼くからちょっと待っててね？」

「焼く？」

あたしの疑問には答えず、ハクアは鹿・・・もう鹿でいいや。それを持ち上げ、ひょい、と上空に少し投げて、それに向かつて

ゴアアアアアアア！

炎を吹き付けた。

口から吹いて……。

そして落ちてきた鹿はこんがりと焼けていた。

それがまた香ばしい匂いを発していて食欲をそそられる。

「はー、召し上がり

「いただきまー！」

鹿にかぶりついてどんどん食べていぐ。そして、あたしの体の倍はあつた鹿は、十分程で全てあたしのお腹の中に収まった。

「いい食べっぷりだね。それだけ食べられるなら、問題はないか」

「・・・『ゴン』と契約すると、『飯もそれになるの?』

そう聞くと、ハクアは頷いた。

「あとは、治癒力とか、腕力とか脚力とか、身体能力は全て常人のそれを上回るよ？試しに壁でも殴つてみて？」

ちゃんとつつく位でね？とウインクをして言ったハクアにあたしは少しときめいた。

とつあえず、壁に向かつて拳をちゃんと当てるとい、

ゴバアツ！！

「え、・・・？」

十メートル位の横穴が開いた。

それから、まずは力の制御をできるようにしなければならないと分かつたので、ハクアに色々教えて貰った。

殴つたり、物を掴む時は、力をこれでもかと言つ程緩めて、本当に触れるか触れないか位にしないと木つ端微塵にしてしまうらしい。

「まあ、要は慣れだよ」

えらくアバウトな・・・。

でも、実際そうか・・・。

「多分早ければ、明後日には制御できるとそれくらいできると思ひながら、そしたら世界を回るうつか？アミの「」とも聞きたいし」

「うん」

早速力の制御の特訓を開始して、予定通り一日後にはできるようになつたから外に出ることにした。

洞窟を出て最初に見たのは、地球ではあり得ない程の森林で覆われた大地と、遙か彼方に見えるのに圧倒的な存在感を放つ巨大な山だつた。

その景色に見惚れているあたしにハクアは言った。

「 ようこそ、ウルベリアへ」

開始（後書き）

亜「ハクア、あたしが寝ている間なにしてたの？」

ハ「アミをつづいたり、アミを眺めたり、アミを舐めたりしてた」

亜「最後のはなに？」

ハ「見てたらつい。テヘ」

亜「ぐ・・・可愛い／＼／＼」

ハ「アミ?顔赤いよ?」

亜「なんでも無い！」

ハ「あー!アミ、待つてよ。道分からぬいでしょ?」

永遠

洞窟は崖の中腹辺りにあつて、ハクアに飛び降りると言われた時、大丈夫なのが心配になつたけど、契約してゐるから大丈夫と軽く言われた。

まあ、確かにそうか・・・。

それでも怖いのは怖いから、ハクアと手を繋いで一緒に飛び降りた。途中何度も木に当たつたりもしたけど、ビームだけがとかしなかつた。

凄いね、契約。

「此処は誰も来ないけど、魔物はわんさかいるから、警戒しておいてね？」

「まもの？」

「や、この前、アミが食べたのも魔物」

ハクアはわたしの手を引っ張つて、歩き始め、魔物についての説明を始めた。

この世界・ウルベリアにはマナと言ひ、地球で言う酸素の様な物質が絶えず循環していて、動物は全てそれを吸収して生きているらし

い。

そのマナを長い間吸収し続けて、他の動物よりも凶暴性が増したり、知性が増したりと表れる症状というか、それは動物によって色々な種類があるらしい。

でも、大部分が凶暴性が増すだけで理性を失つて暴れるらしい。

知性が増したりするのはほんの一部だけ。

「魔物の始まりは約五年前。たつた一体から始まつた」

そのたつた一体の魔物と言うのが、繁殖力の高い生物だつたみたいで、瞬く間に増えていつたらしい。

最初はその種の魔物しか居なかつたのが、異種交配とでも言えぱいいのか、それによつてどんどん種類が増えていつて、気付けば世界には魔物が溢れていたらしい。

「ま、それで滅びたりした訳じゃないけどね？現に今も、ウルベリアは存在している訳だし」

ハクアはそう言つて、魔物の話を終えた。

*

三日くらいかけて森を抜けると、人の手が全く入っていない平原があつた。

視認できる範囲だけでも結構な数の魔物が居るけど、どの魔物もあたし達に襲い掛かってきたりしない。

ハクアが言うには、魔物ももとは普通に動物だから、本能があたしたちは危険だと告げているみたいで敵わないことが分かっているらしい。

ちなみにハクアと契約した恩恵というか、そういうたものは結構ある。

遠くの物が見えたり、普通なら聞こえないレベルの音が聞こえたり、ほんの少しの匂いも分かつたりと、簡単に言えば、感覚という感覚の全てが、桁外れになっている。

「だから、当分アミの相手はわたしがするから」

「うん。それで、この平原でどこまで続いているの？今の視力でも先がずっと平原なんだけど・・・」

「そりやそうだよ。普通の人間が此処を抜けようとしたら、どんなに強い人でも一月は掛かるもん」

「一月ね・・・何でだろ？既に百年生きてるからなのか、長いと思わない」

聞いた瞬間、え？たつたそれだけ？とか思ったもの。

「あはは。時間に対する感覚もわたしたちと同じになるからね。今のアリだつたら、千年が一年くらいに感じるかも知れないよ？」

「千年つて……いくら何でもそこまで寿命は持たないでしょ？」

「ドラゴンだけなら、それくらい生きても可笑しくないと思つけど、契約したとは言つても、結局あたしは人間なんだし……あれ？でも、契約して血が馴染むのに千年掛かることもあるって言つてたし、あるのかな？」

でも、仮に寝てる間体の時間が止まつてるとしたら、生きてるのはむしろ当たり前な訳だし……。

「ううん。持つよ？とにかく、死なないから」

「……は？」

「死なないよ？アリも、もちろんわたしも」

「え？どうこいつ？」

流石にこれはやめてと聞き流してはいけない。

死なないってことは、要は不死身つてことだし……。

「この、死なないって所が、ドラゴンと契約して得る」との出来る最大の恩恵、とでも言えばいいのかな？わたしたちドラゴンの生命

力は、他のそれとは一線を画しているかい

「でも、それが死なないって」とに繋がる訳じや無いでしょ？」

「もううん

ハクアは歩き始めた。

あたしもそれに付いていく。

「ここの前、魔物の話をしたでしょ？」

空を見上げ、後で手を組みながらハクアは聞いてきた。

「うん。約五千年前から始まつたって……」

「そう。でもね？わたしたちドリゴンはもっと前から、それこそ、
ウルベリアが誕生した位大昔から存在してゐる」

「それって、どれくらい前から？」

「ざつと数えて八十億年」

「そんなんにー？」

「うん」

地球で言つて、恐竜みたいな存在つてことなのかな？

例えが思いつかない。

「でも、その時を全てのドラゴンが生きてる訳じゃなくて、今生きてるのは、わたしを除けばほんの四体だけ。他のドラゴンは、契約者が見つからなくて、寿命で死んじゅつたり、老衰して殆どの力を失っていた所を、人間や特別強い力を持つ魔物に殺されたりしてね。・・気が付けば、たったのそれだけになつてた・・・」

顔が見えないから、分からないうけど、多分今のハクアは悲しい表情をしていると思う。

「話が逸れたね。

ドラゴンは元から超長寿の生命体であり、自分が認めた者と契約を結ぶことが出来れば、永遠の命を得るってこと。

未だに、何故そうなるのかは分かつてないけどね？」

振り向いたハクアは、いつもと変わらない顔をしていて、悲しんでいた様な気配すら無かつた。

「・・・・・」

「もしかして、迷惑だった？」

何も言わないあたしに対し、何を思ったのかハクアは突然そんなことを聞いてきた。

「え？ 何が？」

「何がつて・・・契約したこと。説明も何もしないまま、半ば無理

矢理な気がしたから・・・」

「そんなこと無いよ。唯、ハクアが悲しんでるんじゃないかなって思つて・・・」

「え？・・・あはは、確かに悲しいけど、もつ慣れちゃつたから・・・
・一人で居た時間が永すぎて。だからって説じや無いけど、そんな心配はしなくてもいいよ？」

寧ろ今は、迷惑じゃなかつたつて分かつたから、嬉しかつたし

「そつか。良かつた」

あたし達はまた手を繋いで、平原を進んだ。

暫く進んだ所で、休憩ついでに空の飛び方を教わることにした。

森を歩いている時に、飛べるつてことは聞いたけど、流石に木ばかりの所を飛ぶのは無謀だろ？と思つて、先延ばしにしてたんだよね・・・

「教えるつて言つても、わたしたちひとつで、飛ぶことは本能だからね。原理がどうの話じやないんだけど」

「でも、あたし本能どうとか翼すらないし」

背中に手を伸ばしてみても、それりしき物がある感じはしない。

「背中に思いっきり力を入れてみて？」

「え？ ビリして？」

「いいから」

「へ・のん」

分からぬいけど、とりあえず言われたとおりにしてみる。

「ふつー。」

バサ！

「え？」

力を入れた瞬間そんな音が聞こえて、首を九十度横に向けて見てみると、そこには白い翼があつた。

間違いなくあたしの背中から出ているんだらけど、痛みとかが全くないのはどうしてだらけ？

聞いてみると、

「どんな傷も一瞬で治るからね。服は直らないけど」

とのこと。

まあ、確かに翼の音が大きかったけど、勢いもそれだけあった訳で、

制服は見事に破れた。

「一度出すのに成功すれば、後は出し入れ自由だから。試しに引つ込めてみて？」

「えっと・・・」

広がった翼を、少しづつ小心翼しく感じで、畳んでいくとまた背中には何もしない状態になつた。

穴が空いた所が少しきスースーする。

「やうやう。それじゃ、練習を始めるから、もう一度翼を出して？あ、力は軽く入れるだけでいいよ？」

「うん。んしょ」

ハクアの言つたとおり、今度はほんの少し力を入れるだけで、翼が出た。

「最初はわたしと手を繋いで、飛んで、少しづつ慣れていくつか？」

「うん」

「はい」

翼を広げながら、ハクアは手を差し出してきた。

あたしはその手を取る。

「行くよ。」

「うそ

手を繋いで、あたし達は空へと舞い上がった

永遠（後書き）

亜「それにしても、不死身かあー・・・ハクア、暇じゃなかつたの？」

ハ「暇だつたけど、人間は色々新しい物を造るからね。それを見ているのは楽しかったよ。後は、偶に仲間とも会つてたし」

亜「どんなドラゴンなの？ハクアの仲間つて」

ハ「年中百分百天然な娘に、どんな時どんな状況でも寝られる娘でしょ。それから、とにかく遺跡巡りが好きな娘と、海でひたすら海獣と戦つてる娘」

亜「へ～・・・面白そうな人達だね？」

ハ「うんー。きっと仲良しくなるよ？」

亜「だと良じいけど」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7765y/>

高町亜美の物語

2011年12月1日19時54分発行